

岡本 悦男さん (かみやま林業振興会)

- ・もともと神山は、天然林の山であったわけでごさいます、炭焼きをしたり、薪を切ったりして、その後に杉、ヒノキを植林して、それを繰り返して、山から収入を得ていくというようなシステムで臨んできたわけでごさいます。鹿害、そして木材の価格の低迷でうまく山が回らなくなって、木が切られない、また、新しく植林されることもない、動脈硬化みたいな状況でないかと思っております。
- ・神山町の森林所有者の現況でごさいますが、林業で食べられるという人は昔でもほんの握りの人で、約9割の森林所有者が10ヘクタール未満（1ヘクタール未満約50%、1ヘクタールから10ヘクタール40%）ということでごさいます。そういう中で、林業ではなかなか食べられないということで、稲作であったり、昔は蚕であったり、たばこであったり、そういう林業という形で町の経済が成り立ってきたのではと考えています。
- ・何とか収入を得るものをつくらんかということで、先人が天然絞り丸太を昭和50年初期に導入したわけでごさいます。町内に約5万本植わっておるはずでごさいます。建築様式の変化によりまして、床の間をつくらなくなって床柱が売れなくなったということで、苗木を植えた当時は、それが成木になったら20万円はするぞと言われてたんですが、今はせいぜい2万円程度での売買となっております。
- ・かみやま林業振興会で導入しましたミツマタ生産、ミツマタは鹿にやられない、手間がかからないということで、会員以外も含めて、約30名が植えております。今は売買価格が原木で1キロ60円、これを原木でなく粗皮を剥いて、粗皮出荷なり、粗皮を取って白くした出荷なりを考えていかなければ大きな収入にはつながらんのではと考えております。
- ・杉、ヒノキは、価格低迷の中で、長伐期に持っていかなければということで、振興会で伊勢神宮の山を見てまいりました。そこが200年の伐期を見据えた木をつくっておるということで、つくっている50歳くらいの大將の人が、3世代、4世代、もっと先を見据えた林業を行っています。長伐期に持っていくためには、間伐をしていかなければひよろひよろの木しかできん。だから、今後間伐を重ねていって、小さいながらも補助金をもらって収入を得ていくようなことが必要ではないかと思えます。
- ・木は植えてから、昔だったら40年、最近になれば60年、70年というような形で伐採して収入を得ておったわけでごさいますが、今の単価ではそういう大きな収入を得られないということで長いスパンで、100年、200年というスパンで持っていかなければ大径材もできんし、収入にもつながらないということでごさいます。

## 廣瀬 圭治さん（しずくプロジェクト）

- 神山の水が30年前に比べて約3分の1になっているという。神山に引っ越してきたときに、山の環境って豊かだなと思っていたんですけども、知れば知るほど水が減っているという話を聞いて、山の状態が神山の水が減っているという原因の1つになっているということで、何とかせなあかんと違うのと。杉を切る理由をつくったらええねんということで、今、お皿やコップとか、ストーブのエネルギーに使ったりして、それで得た収入とかを山の手入れとかにつなげられるような、そういう活動ができないかなと考えました。
- みんなの前で言うのもおこがましいんですけども、杉を経済の価値としか見ていないとやっぱり限界があるというか、皆さん、売れない、切る理由がないとおっしゃるんですけど、切る理由さえあれば、お金にかえるということがイコールじゃなくても、地域の糧にしたり、資源として使ったり、将来のために切ったりといろいろな理由があると思うんです。諦めムードを、僕はデザイナーなのでデザインの方で、何とかしたいなのというのが実はしずくプロジェクトで僕がほんとうにやりたかったこと、裏テーマでありました。
- 魚梁瀬とか有名なところとスペック勝負するとかない嘛ので「神まいおりし神山杉」というキャッチコピーをつくって、風光明媚なところに出てきた木を自分のおうちとか、テーブルとかに使ってほしいという思いでポスターをつくっています。スペックで物を選ぶんじゃなくて、神山杉、神の山から出た杉を自分ちの、床材、縁材に使ってもらいたいというような訴求ができたかなと思っています。新しい価値のつくり方ですね。
- ニュージーランドのレッドウッド、日本でいうほんとうに杉林。杉と杉の幹につり橋のようなものをかけて、地上10メートルぐらいの高さを森散策できる設備が整っていて、1回二、三千円。観光客がひっきりなしに来ているんです。あんまり資源に手を入れなくておもしろいやり方だなと思って、こんなのを神山ですてきだなと思っています。ツリーハウスの新しい形として、デザイン性のあるものとか、大き目のものとか各地に出てきているけれども、こういうところにわざわざ泊まりに来る、町民の皆さんは山の中に何でわざわざ泊まりに来るねんという話やと思うんですけども、こういう視点があってもおもしろいなと思っています。
- 産業のある事例でいくと、杉を切った後に杉を植えるんじゃなくてアカマツを植えているところがあります。杉が売れへんのやったらアカマツを植えてマツタケの産地にしようという発想。水が回復してからの話かもしれないけれど、小水力という小さい発電ができるようになっているので、大手に頼らない、地域で電気をつくるということも可能になってくるのではと思っています。

河野 公雄さん (グリーンバレー)

- ・グリーンバレーで森づくりの活動を始めたのは、2005年の3月、約13年になります。神山育ちですが町人の生まれだったので、山にほとんど関心はありませんでした。みんなで集まって月1回催し物をして楽しいことをしたらいいということで始めてみました。最近、かなり山に興味を本格的に持ってきたんですが、最初はほとんど遊びで、楽しく感じていました。今、ちょっと苦しく感じております。
- ・山、森林の現状をどう捉えるかということで私が思うのは、杉とヒノキが多過ぎること、それと、山に入って歩いてよくわかったんですけども、かなり山が荒れているということを実感しました。ツタがすごく絡まって、枯れてはいないんですけども、このまま置いておいてもいい木ができるのかなと思うような木がいっぱいありますので、ただ単に緑のまま置いておけばいいもんでもないなと思いました。
- ・実感として思うのは、木は重いということですね。機械化しないと個人の力では難しい。1立米で森林組合の引き取り価格が約10,000円です。もう大変重くて、伐採、枝打ち、運搬までしてやっと10,000円ですから、なかなか採算もとれないと思います。
- ・所有者の方が個人の山がほとんどなんですけれども、ただ、僕らが整備している大栗山でも30人ぐらいの持ち主の方があまして、現在、生きている方の場合というのはほんとう5、6人程度しかないみたい。ほとんど相続等もできておりません。全般的に、山林についてはほとんど相続登記がされていない状態です。
- ・将来をどう捉えるか、林業は木材価格だけで勝負するのはかなり難しい、もう一つ別の視点を持って山のことを考えたほうがいいんだろうと思います。1つは観光だと思います。人、物、お金をとにかく呼び寄せる、観光で人を呼び寄せて活性化するというのは、一番コストもそんなにかからなくていい方法だろうと思います。谷川沿いにチップの道路をつくって、歩いて登ってもらう。サイクリングロードをつくって、柴小屋あたりから下まで駆けおりにしてもらう。トチの実やドングリのなる森をいっぱいつくって、ゆでて食べてもらったり、口にいっぱい含んで、リスの顔になった写真を撮って飾るとか、悲願寺までわざと悪い道路をつくって、トラックの荷台で運ぶとか。
- ・最初は遊びだったんですけど、だんだん、これはいい木とか、もう少し枝打ちしたほうがいいのか本格的になってきます。気を抜いてやると、(そんなに脅すわけではないんですけども)危険もありますので、イベントも3カ月に1回の楽しいこと、2カ月はハードにやるという感じで分けてやっていかないと、楽しいだけでは森林整備は進みません。

栗飯原 勝芳さん（徳島中央森林組合）

- ・当組合は、汗水たらして山を育ててくれた森林所有者に少しでも山の恵み、お金を返したいというのが基本的な考えでございます。
- ・組合は平成15年に5町村が合併したもので、神山だけでなく、上勝、勝浦、徳島、佐那河内もあります。そういう中で、本署は神山にもあります。  
森林所有者に恵みを回すには、まず、自分のところをしっかりと財務状態、組織体系にせないかんなど。経営の安定を一番に掲げまして、3年計画で改造もしてまいりました。
- ・約1万5,000ヘクタールの山にどのぐらい木の蓄積量があるかといったら500万から600万 $m^3$ 。当組合で搬出間伐というのをやっています。基本的に間伐でなければ補助金がありません。木を出すのに大体経費1万円から1万2,000円かかるんですね。補助金がなかったら、2,000円ほど足りません。補助金のおかげで所有者の方にお金も返すことができているというのが現状です。
- ・当組合で、神山の管轄でいいますと、年間約50から60ヘクタールしか間伐ができません。皆伐は今のところ基本的に補助金はありません。年間で当組合の共販所で競りに出てくる分が大体5,000から6,000 $m^3$ ですね。ちょっと増えてきておるんですけども。神山町の1年間に（木の）増加分は、データでは約60,000 $m^3$ なんです。出してくるのが6,000 $m^3$ 、増えるのは60,000 $m^3$ ですよ。そんな状態です。
- ・搬出間伐は機械で出します。3点セット、プロセッサ、スイングヤーダ、フォワーダですね。あと、グラップルで4点セットもあるんですけども。2組しかありません。3,000 $m^3$ ずつ、6,000 $m^3$ ぐらい搬出できます。そう考えると、山を整備するということもなかなかできないということです。このセットを買うと1セット5,000万円ぐらいします。2,500万円は組合が出しておるのであります。  
昨年度からとくしまアカデミーから有志の方が担い手になっていただいております。今年もアカデミーから数人の方が入ってくれるようになってはいますが、担い手もつからないかん、機械も買わないかん、非常に難しいこともたくさんあるんです。
- ・皆さん方に言っていただいたように、いろいろなことをしたい、私も、同じようなやり方では絶対やっていけないのはわかっているけれども、山をいろいろな形にしていきたいのは山々なんですけれども、私たち、まず足固めができたかなというようなことがあるので、私らのビジョンに向かって、進んでいくような形になると思います。

齊藤 郁子さん (カフェオニヴァ)

- ・カフェオニヴァでは、ウッドボイラーと薪ストーブを導入しています。薪のエネルギーによって床暖房、給湯、お風呂、あと、最近はそこでパンを焼いてみようと思っています。飲食店経営、生活面のコストを削減できるので、私たちも長期の休暇をとるのがストレスなく行えているかなと思います。
- ・私は、暮らしと山がもっと近くなればいいなと思っていて、気軽に入れる場所があって、山にハンモックを持って行って本を読もうとか。あと、間伐を進めて雑木林にしたいんですけど、日の当たるところは桜を植えたり、あと、ナッツとかフルーツの木を植えて、みんなで山からおいしいものも収穫したいなと思います。そういった暮らしを通じて、戦後の高度経済成長のライフスタイルというものをみんなで考え直してみても、ほんとうの豊かさとは何かと考えるきっかけになればいいかなと思っています。
- ・南ベルギーでは、所有しているけど世話はできないという山の所有者と、薪が欲しいけど山がないという人をつなぐプロジェクトが動いています。年に1度、山の所有者の土地を欲しい人の数で割り、くじで場所を割り当てます。どの木を切るかは、ガーディアンという森の専門家が決めます。もし印がついていない木を切ったり傷をつけてしまうと、残しておく道が崩れないとか大事な木を倒した場合には、ペナルティーで罰金が取られます。お正月が終わったら森のガーディアンが一斉にうまくできたかなと森を見て回って、来年の森はどうしようとみんなで話し合う。山は個人的なものという認識はヨーロッパでは薄く、みんなの社会的な資産という感覚がすごく強いんだなという気がしました。
- ・神山に帰ってきて山を歩いてみたりすると、人が入っていないんだとか、誰も気にかけていないんだなという、ちょっと寂しい真っ暗な、ツタがはって竹が密集しているところが気になってしまって、それは対照的でした。プロジェクトが動いている土地と動いていない土地とではほんとうに大きくまちの景観が変わってしまうなど。
- ・地元のハンターの方に聞いたんですけど、人がちゃんと手を入れている森の動物は数が極端に変わらず、数のバランスがよいそうです。突然真っ暗なほったらかされたところを全部切ったり、極端な仕事をする、動物の増減が激しくなるなど環境が変わりやすい。大きなお金を使うんじゃないで、暮らしの中でもっと薪を使うとか、楽しいから山に入るとか、そういったので少しでも場を整えていけたら、お金もかけず、少しずつ緩やかにきれいになっていくんじゃないかなと思いました。

田中 泰子さん (「ある日森で・・・」)

- ・神山から下流の鮎喰川で私は育ったんですが、これまで遊んで育ってきた、目の前にあった川が何か違ってきているというのを感じるようになります。ほんとうに水が減ってきているなど。目の前の景色が変わっているところで、ざわざわした危機感を感じています。
- ・そこで始めたのが、神山森聞きという活動です。山のことは、みんなで一緒に考える場をつくらなければ変わっていかないなというのを感じていて、ただ、何か声高に言うのではなく、まずは神山のことを自分が知るところから始め、その後、(今は関心のない人も含め) たくさんの人に知ってもらおう、そして、山のことを自分もやるというところで活動をしてきました。
- ・山師の松村さんがずっと仕事をしてきた山に連れていってもらいました。松村さんがここやという場所に車をとめて2人で車をおりたんですけど、松村さんが全然言葉を発さなくて、一言、手入れができておらんという言葉をおっしゃられました。車で帰りながら松村さんにお話を聞いてみたんですけど、松村さんから返ってきた言葉は、懐かしいというより寂しいという言葉でした。ほんとうに言葉を失くすというか、でも、このままで終わらせるのは嫌だなどと思って、何もできないかもしれないけど、何かはできることがあるかもしれないというところで自分は活動しようと思いました。
- ・山学校というか、「ある日森で・・・」でこだわっているのは、とにかく神山の人とやるというところで、山のことはやっぱり神山の人とやらなければ変わらないというのを思っています。私の向かい、お隣に住んでいる方、彼らの協力がなくしては山学校ができていない、それぐらい頼りになるお二人で、そのほかにも地域の人たちと一緒につくっていています。
- ・山の声を聴くというところで、桜を植えて続けた西尾さんの話では、人間が植えたものは生き物が食べちゃうんだよねというお話があって、植樹をしたりというところが、もしかしたら無理があるというか、植物も生えたい場所があるんじゃないのかなというところで、それって大事なことじゃないのかなという思いがあって、今は生えてきた木を大切に、この木たちがどうやって育っていくかというところを見ていきたいと思っています。
- ・「ある日森で・・・」でお話を聞かせていただいた方たちが亡くなりました。皆さんの言葉の中に後世に伝えたいことがたくさんあったような気がしていて、私自身は話してくださったことを何か遺言を受け取った時間だったような気持ちで、今、ここにいます。山やふるさとへの思いをたくさん胸に抱えられながら生きてこられた方たちだと思っています。

高橋 幸次さん（神山町林業活性化協議会）

- ・協議会のお世話になる前は、県の職場で林業行政に38年間携わっていました。
- ・学生の頃も職場に入ってから、木材価格は良くて林業はいけいけドンドンの時代でした。しかし、昭和50年、51年と県内で台風の大雨による大災害が発生し、神山でもスギの20年生くらいの林が大きな被害を受けました。
- ・その頃、職場の上司から、酒の席で森林林業についての考え方を聞かれたことがあり、水のことなどを考えると針葉樹が多すぎるのではないかと聞いたところ、おまえは山の人の生活をどう考えているのだと指摘され、反論できなかつたことがありました。
- ・その後、平成の時代になって木材価格が長期的に低迷し、林業は冬の時代に入ったまま30年近くが経過しました。
- ・平成17年から、徳島県では全国に先駆けて林業再生プロジェクトが始まり、増産だ、倍増だという時代になって10年余りが経過し、合板用材や発電用のチップ用材の需要は増え、価格も上がりましたが、製材向けの木材価格は低迷したままとなっています。
- ・そのような中で、それだけじゃいけないよなどと思いながら、半ば嘘をつくような気持ちで増産だ、倍増だと言っておりました。
- ・そういう思いで神山に来たところ、町長さんが既に町有林の伐採跡に広葉樹を植えたり、標高の高いところは広葉樹にすべきだとも言われていたので、神山の森づくりを、もう一度多くの人の知恵を集めて考え直すことが出来るのではないかと思います。
  
- ・上分江田地区の写真を見て説明。写真に写っている東側の谷は、ちょっと険しくて広葉樹が残っており、景色を見るのにはいいが、広葉樹の間に植えられているスギは将来切って出せるかどうか分からない。しかし、手入れは必要だということで、森林ビジョンの議論をするときに、こういう場所をどうするかが大きなテーマになってくると考えられる。
- ・森林の現状は、私有林が91%、国有林は3%程度、町有林・県有林・公団造林・林業公社が合わせて6%
- ・樹種別の面積をに見ると、スギ54%、ヒノキ12%、マツ12%、クヌギ1%、広葉樹19%、8割が針葉樹、2割が広葉樹となっている。
- ・ボリュームは、スギ78%、ヒノキ9%、マツ8%、広葉樹5%でスギが8割を占めている。
- ・林齢は、46年生から65年生が突出して多く、大半が昭和30年代から40年代にかけて植えられたものである。
- ・成長量は、年間6万立方メートル、生産量は1万立方メートルに満たない。バブル崩壊前は2万立方メートルくらいあったのに、ずっと最近まで落ち込んだままであった。ここ2、3年上向いているのは森林組合の体制が立ち直ったためと見られる。
- ・現状は圧倒的にスギが多いが、森林の木材生産以外の機能（生態系サービス）も充実させて、みんなが等しく恩恵を受けられるよう本気で取り組む必要があると思っている。